

## 令和7年度 東北ブロック資源評価会議（新ルール）

（ズワイガニ太平洋北部系群の管理基準値等に関する研究機関会議併催）議事概要

日時： 令和7年8月28日（木）13時00分～18時00分

会場： 八戸プラザホテル プラザホール（Teams によるオンライン会議併用）

参加機関：14 機関 参加者：61 名（有識者含む）

## 【マダラ本州太平洋北部系群 資源評価報告案の説明・検討】

水産研究・教育機構（以下、「機構」という）から資源評価結果および漁獲管理規則に基づく将来予測結果について説明した。なお、本資源は2024年7月よりTAC管理のSTEP1に移行し、2025年7月からはSTEP2に移行している。資源量はトロール調査による年齢別現存量をチューニング指標としたVPAによって推定されている。昨年度から手法などに大きな変更はないものの、年齢別資源尾数を推定する際の漁獲物の体長組成取得方法について一部修正を行っている。

質疑では、有識者からSH会合では実情に合った評価が求められている中で、予測される漁獲量と実際の漁獲量に乖離がある。大型の個体が少なく、狙いがスルメイカやサバ類に変わっているとのことだが、その理由でFが下がったのか、といった質問や近年分布が北に寄っているのは黒潮大蛇行の影響があるのか、といった質問、2022年級は比較的多く、2023年級は1歳時に多く見えたが、ある程度今後の資源として期待して良いのか、といった質問があった。

質問に対し、機構から青森県沖では大型個体狙いが続いているが、岩手県沖や宮城県沖では漁獲圧が低く、特に宮城県以南ではマダラの分布が薄く、イカ類やサバ類を漁獲しており、Fが低下していると回答した。また、2022年級も北に偏っていたが、今年の親潮の南下で分布も南下しつつある、2023年級は調査では少なく、漁獲物からはある程度見られているが、まだ情報が少ないため、慎重に見ていく必要がある旨説明した。

JVから、2025年は親潮が南下したとのことだが、加入状況についての質問や陸奥湾では2021年級が多いが2022年級は少なく、2021年級が多かった地域などに関する情報があるか、といった質問があった。

質問nに対し、機構から2025年級の稚魚の密度は低い、2024年級よりは多いこと、沿岸の定置網などでは3歳魚が多いが、2歳魚は成長も悪く成熟していないので、沿岸漁業で漁獲されるようになるのは先のことになる旨説明した。

本年度の資源評価案については、当初案から修正なく承認された。

## 【ヒラメ太平洋北部系群 資源評価報告案の説明・検討】

機構から資源評価結果および漁獲管理規則案に基づく将来予測結果などについて説明した。資源量はVPAによって推定されており、手法などに大きな変更はないものの、本年度

は新たに沖合底びき網漁業の標準化 CPUE を指標値としたチューニング VPA やリッジ VPA について検討、比較を行い、補足資料として示した。

質疑では、有識者から漁法別の漁獲状況から資源がいる一方であまり接岸していないという説明があったが、加入はあるので産卵はしているようである。安定した加入が見られているようで、またイカナゴが減ってもマイワシを食べているという説明だったので、資源として心配することはないと思って聞いたというコメントが寄せられた。また、チューニング指標値として沖底 CPUE で検討しているが、その他にこういったデータを検討しているのかという質問や Age-length-key は毎年更新しているのかという質問があった。

質問に対し、機構から漁獲量が多いところが重要なので、小底、刺し網や各県の調査船の結果についても情報を収集していきたい、また、Age-length-key は毎年 2 回作成しており、マダラ、ヤナギムシガレイも含めて力を入れているところであると回答した。本年度の資源評価案については、表現上の修正を含み承認された。

#### 【ヤナギムシガレイ太平洋北部 資源評価報告案の説明・検討】

機構から資源評価結果および漁獲管理規則案に基づく将来予測結果などについて説明した。資源量は金華山～房総海区の沖底 CPUE を標準化したものを指標値としたチューニング VPA によって推定されており、手法などに大きな変更はないことを報告した。

質疑では、有識者から加入の減少が気になるところだが、親潮の南下があったとのことなので、その効果に期待したい、というコメントをいただいた。また、痩せているという報告があったが、小型化が見られるのかという質問や小型の個体が少ないのは漁獲自体が少ないのか、それとも投棄されていたりするのかといった質問に加え、調査での漁獲状況や産卵は北の方でも行われているか、といった質問も寄せられた。

質問に対し、機構から小型化が見られており、小型個体は単純に入網しにくく、入網した場合には投棄されず水揚げされる、調査ではあまり漁獲されず、岩手などの北部海域ではそもそもヤナギムシガレイが少ないが、分布している個体はそのエリアでも産卵している可能性が高いと回答した。

JV 機関からは本資源の資源状態は良好とは言えず、今回下方修正された。漁業者の間でも獲れないという印象が強い。将来予測では加入量に平均値を用いており、甘めに見積もっているのではないかと。といったコメントが寄せられた。特に 1 歳魚の加入が悪化している点が要因と考えられるが、その背景として産卵場や若齢魚の生息環境の変化・悪化が関与している可能性はあるかという質問が寄せられた。

質問に対し、機構から成熟体長の小型化が見られている可能性があることや繁殖に伴う浅深移動が過去にはあったが、近年は見えにくい事を説明し、最後に繁殖生態などの変化に対して気候と JV 共同で研究を進めていくこととなった。

本年度の資源評価案については、表現上の修正を含み承認された。

【サメガレイ太平洋北部 資源評価報告案の説明・検討】

機構から資源評価結果および漁獲管理規則案に基づく2026年算定漁獲量などについて説明した。金華山～房総海区の沖底標準化 CPUE を資源量指標値とした2系ルールに基づき算出した算定漁獲量を提案した。手法などに大きな変更はないことを報告した。

質疑では、有識者から震災前には宮城県船が福島県以南でも操業し、大型の個体を漁獲していた印象がある。震災以降は宮城沖のみで操業しているが、その影響で漁獲物の体長組成に影響が出ているのではないかといった質問や近年岩手以北でも漁獲が増えているが、北方海域の沖底の CPUE を標準化しない理由について質問があった。

質問に対し、機構から近年の情報ではあるが、宮城県沖でも大型の個体も取れていること、かつては宮城県船は夜間に沖合で操業し、昼間にヤリイカなどを取っていたという情報がある、と回答した。

JV から 2023、2024 年の石巻では小型魚の測定が十分でなかった可能性がある。市場では 20cm 程度の小型個体が確認されており、宮城県の調査でも近年小型魚が漁獲されている。今回の解析は 2024 年までのデータだが、2025 年には漁獲量がすでに約 700 トンと急増しており、この要因について関心を持っている。何か増加について考えられることはあるかといったコメントと質問があった。

質問に対し、機構から今年の漁獲物にはさまざまな体長階級の個体が漁獲されていると聞いており、そのため特定の年級が多かったわけではなく、全体的な分布が変わったためと考えている。具体的には、高豊度が確認されている 2008～2010 年級の漁獲加入のタイミングで震災が発生し、漁獲を逃れて深場に大型魚が残っていることや調査で確認された 2020～2022 年級も漁獲対象サイズに成長しつつあることで、さらにここ数年は高水温の影響もあり浅場に入って来ず漁獲されなかったものの、2025 年の親潮冷水南下も相まって漁場に見られるようになったのかもしれないと考えていることを説明した。

本年度の資源評価案については、表現上の修正を含み承認された。

【ズワイガニ太平洋北部系群 資源評価報告案および管理基準値案等の説明・検討】

機構から、本系群の過去 5 年間における検討の経緯を含む令和 7 年度資源評価の結果、再生産関係の検討結果、管理基準値および漁獲管理規則案などの提案、管理基準値案および漁獲管理規則案に基づく将来予測結果の各項目について説明がなされた。トロール調査による現存量結果を基に JASAM を用いて雌雄別の資源量、M および F を推定した。また、HS 型再生産関係を適用し、管理基準案にはこの前提から算出される MSY に基づく水準を用いた。M には 1996～2024 年の平均値を用いて将来予測を行い、 $\beta$  を変化させたときの各管理基準値を上回る確率を算出した。

資源評価の質疑では、有識者から 2024 年の宮城県沖で漁獲は狙っての操業なのか、また雌雄比はどうかと言った質問が寄せられ、機構および JV から、狙い操業ではなく他の種を狙ったときにたまたま取れたことや、例年は福島県に近い海域で取れることが多いが、前漁期

には岩手県に近い海域で漁獲されたと回答した。

研究機関会議では、有識者から神戸プロットでは資源状態は良いものの、実際の漁業では取れていないことについて漁業者からの反応が気になること、SBmsy を計算するための世代時間を 20 世代で良いのかということについて質問があった。

質問に対し、本系群では雄の資源加入が 8 年後で、その後数年で最終脱皮までかかるので長めに取っている。世代時間の 20 倍についてはそれ以上長くしても大きな違いは出てこないと思われると回答した。

機構内部から  $\beta$  に関する標記を改めた方がよいこと、採用した M の条件設定を明記した方がよいこと、M をランダムにした資料は混乱を招きかねないことから、掲載しない方がよいといった提案やコメントが寄せられた。概ね指摘に従い、修正した。

JV から M が変動する要因、8 齢期から評価している理由および M の仮定を見直す場合の基準について質問があった。また、今後は毎年評価が行われるので大きな変化が見られる場合には見直しも検討いただきたいとの要望があった。質問、要望に対し、大きな変化があった場合には協議するが、基準については曖昧である旨説明した。

上記の質疑応答の内容について会議終了後に整理し、研究機関会議資料の修正案として掲示し、(その後承認を得た)。また、毎年更新される評価内容や将来予測結果などに対し、数値の大きな変更や疑義などが生じた場合には、担当機関である水産機構を中心に JV、有識者を交えて検討を行う。検討結果は資源評価会議や担当者会議で報告し、漁獲管理規則や管理基準値の変更を伴う場合には研究機関会議を開催することを本議事概要に明文化することを確認した(本内容)

評価報告書案については表現上の修正を含み承認され、研究期間会議資料案については上記の加筆修正を加えた内容で承認された。